

日米開戦

千葉県船橋市に行田公園・行田団地という場所が在り、私もたまたま車で通り抜けることがある。

車で縦断していると気が付かないが、地図を見るとこのエリアはきれいな円形を描いている事が判る。

初めて上京した頃は、その規則的な形を奇異に感じ、モダンな住宅地を作るために整地したのかと思っていたが、その後、謎が分かった。

かつて、此処には日本海軍の無線所があり、円形の外周道路に沿って巨大な電波塔が林立していたとのことだ。

80年前真珠湾攻撃を命令する『ニイタカヤマノボレ1208』は此処から送信されたそうだ。

1853年のペリー提督が率いる米国東インド艦隊の来航により、太平の眠りを覚まされた日本は、それ以降、日本が欧米諸国に植民地化される恐怖に怯え、ヒステリックに国力増強と軍備増強に努めて来た。

そして、外国に侵略される恐怖に骨がらみになり、狂った様に軍備増強する内に、何時の間にか、日本自体が外国を侵略する側に回っていた。

その国民的ヒステリーの終焉が、太平洋戦争の敗北であった。

孫子の兵法の真っ先に、『兵は国の大事にして、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり』という言葉が出てくる。

戦争は国家にとって重大事であり、国家の存亡にも関わってくる。従って戦争を始める前には慎重に検討をしなければならない。

事実、敗戦後、昭和25年まで日本という国は事実上消滅していた。(外洋に出る日本船舶は日本国旗を掲示する事を禁止され、事実上の無国籍船であった。)

米国との開戦に当たり、日本の戦争指導者に米国に勝てると思っている人は誰も居なかった。

勝てる見込みも無く戦争を始めるなど、余りにも無責任と言わざるを得ない。

それでは、昭和12年から日米開戦に至る昭和16年までの間に、戦争を回避する事は出来なかったのかと言うと残念ながら無かったと言える。

書き出すと長くなるので、詳細は続編で述べたいが、日本と米国のボタンの掛け違いは、日露戦争の勝利にまで遡らねばならない。

この時、指導者が正しく判断していたら、その後の日米戦争への道を歩む事は無く、両国共に栄えていたことだろう。

米国との開戦に最後まで反対されていた昭和天皇は首相に東条英機を任命した。
当時、東条は米国との開戦派の急先鋒であり、軍部に絶大な影響力を持っていた。
しかし、同時に、天皇陛下への忠誠心は人一倍強く、天皇陛下から命令されれば、主義主張を翻しても、開戦を避ける事だろうと考えられた。
まさに『毒をもって毒を制す』とお考えであった。
暗殺の危険も顧みず、必死に戦争回避の道を探った東条であったが、戦争回避の可能性は無く、真珠湾攻撃を以て戦争が始まることになる。
12月8日未明、全ての努力が無駄に終わった事を知った東条は、皇居に向かって泣いてお詫びしたという。